鬼子母神の語られなかった物語

中井本蓉

はじめに

人の子どもをとって食べていた鬼子母神が釈尊に諭されて改心し、仏教に帰依して子どもの守り神になったという「鬼子母神の帰仏物語」は、現在日蓮宗において広く語られており、鬼子母神の帰仏を説く経典も数多く存在する。この「鬼子母神の帰仏物語」について、私は二〇二一年の教化学研究発表大会において、「鬼子母神の物語論的研究」と題して研究発表を行った。この研究において、鬼子母神の帰仏を説く経典群の内容を比較した結果、現在日蓮宗において語られている鬼子母神の物語（以下「現在語られている鬼子母神の物語」）とまったく同じ内容を説く経典は見当たらなかった。このことから、「現在語られている鬼子母神の物語」は、経典（テキスト）として保存された物語（ストーリー）ではなく、「語られ続ける」ことによって存続してきた物語（ナラティブ）だったのではないか、と考えた。「現在語られている鬼子母神の物語」が、「語られ続ける」ことによって存続してきた物語（ナラティブ）であるとするならば、今後も時代の変化と共にその内容は変化していく可能性がある。したがって、「現在語られている鬼子母神の物語」に組み込まれなかった（語られなかった）物語を再度確認していくことによって、これからの時代の新しい鬼子母神の物語の語り方を探ることができるのではないだろうか。よって今回は、数多くある鬼子母神関連経典群のなかでも特異な特徴を有する、義浄訳『根本説一切有部毘奈耶雑事』について見ていきたい。この経典

は、次の三点について詳細に語られているという点において、他の鬼子母神関連経典とは異なっている。

（一）鬼子母神の誕生と成長
（二）鬼子母神の前生譚
（三）鬼子母神の帰仏後の後日談

右の（一）～（三）について、先行研究においてどのように扱われているかを確認すると、まず『根本説一切有部毘奈耶雑事』の所説をもとに書かれた書籍には次のようなものがある。

①山田琢玄『鬼子母神縁起詳談』（等潤会、一八九二年）
②「鬼子母神物語」（『仏教説話文学全集』第一巻、隆文館、一九七六年、二七三―二九〇頁）
③大嶋忠雄『愛のハーリティ―鬼子母神の物語―』（日蓮宗新聞社、さだるま新書、一九八六年）

右の三冊はいずれも「後日談」には触れておらず、①と③においては、話の筋（語られる順番）も変更されている。次に、近年の宗門内における『根本説一切有部毘奈耶雑事』の所説をもとにした講演および論考については、次の二つが挙げられる。

④第十一回「心といのちの講座」（平成二十六年十一月十八日、於日蓮宗宗務院）
金子保 講演「仏教とこころの深層―物語の心理臨床的意味―」Part1「鬼子母神の物語」

⑤中村啓承「あなたは鬼子母神を許せますか?」（『宗報』令和四年二月号、二〇二二年、四六―五四頁）

④は、やはり「後日談」には触れないものの、その他の『根本説一切有部毘奈耶雑事』の所説に関しては順番通り紹介されている。⑤は、「鬼子母神の前生譚」についてのみ触れている。

以上、『根本説一切有部毘奈耶雑事』の所説をもとにした著作、講演、そして論考を確認したが、いずれも後日談については触れておらず、また話の筋が変更されているものもある。したがって今回は、『根本説一切有部毘奈耶雑事』に説かれる鬼子母神の物語の内容を順番通りに見ていき、最後の後日談についても確認していきたいと思う。

鬼子母神（歓喜）の誕生と成長

『根本説一切有部毘奈耶雑事』全四〇巻（大正二四、二〇七上―四一四中）は、景龍四（七一〇）年、義浄によって訳出された。その内容は、部派の一つである「根本説一切有部」に伝わる、律に関するさまざまな伝承が収録されたものとなっている。第一門から第八門までの全八門で構成されており、各門につき第一子から第十子までが収録されている。

このなかで、第三十一巻末尾にある「第七門第一子」（大正二四、三六〇下―三六三中）に、鬼子母神についての詳細な物語が記されている。まず、「第七門第一子」の冒頭において、話の内容をおおまかに四つに分け、それを詩の形にして述べている。これによれば、「第七門第一子」は①「笈多児と宿する」（大正二四、三六〇中―三六〇下）、②「王舎の薬叉神」（大正二四、三六〇下―三六三上）、③「児に衣を施して項に繋げる」（大正二四、三六三上―三六三中）、④「称名して祭食を与ふ」（大正二四、三六三中）という四つの物語から構成されている。このうち、①は、まだ幼い男の子の母親である比丘尼が、子どもと夜一緒に寝ることを許してもらえるよう釈尊に請う話であり、鬼子

母神の物語とは別の話である。②～④の話の内容を分類すると【図一】・【図二】のようになる。

『根本説一切有部毘奈耶雑事』において説かれる鬼子母神の物語は、鬼子母神が生まれる前の、彼女の父親の時代の話から始まる。摩掲陀国の首都・王舎城にある山の麓に、「薬叉」が住んでいた。「薬叉」とは主に森林に住む精霊で、人々に災いをもたらすこともあれば、恵みをもたらすこともある存在とされる。「夜叉」と訳される場合もあり、仏教においては仏法を守護する八部衆のひとつにも数えられている。鬼子母神の父親にあたるその薬叉は「娑多」と言い、王舎城を守護して人々に恩恵をもたらす、言わば「善い薬叉」であった。

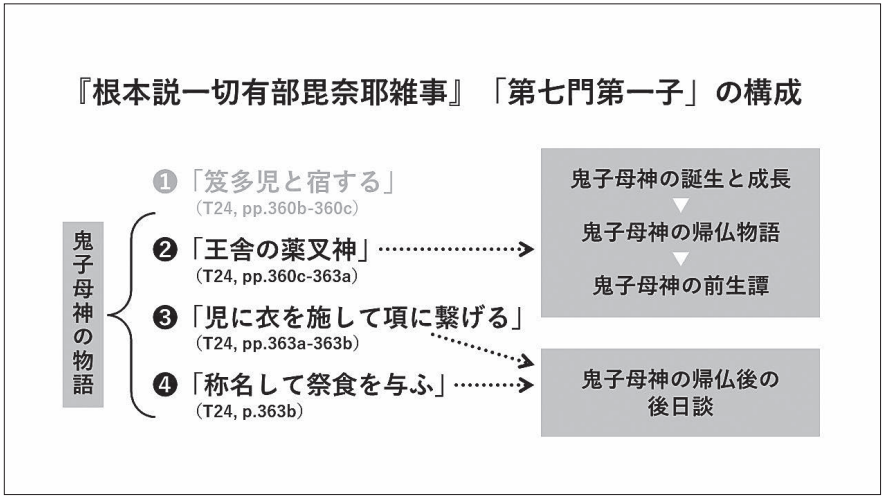
一方、摩掲陀国の北方にある健陀羅国（ガンダーラ）にも、国を守護する「善い薬叉」がいて、名前を「半遮羅」と言った。

ある時、諸方の薬叉が集まる集会で出会った沙多と半遮羅は意気投合して親友となり、互いの子どもを結婚させようと、と約束する。やがて娑多の妻が女の子を生んだ。この子はとても美しい容貌をしており、見る者の心をよろこばせたので「歓喜」と名付けられた。歓喜には「沙多山」という弟がおり、父親の娑多が亡くなったあとはこの沙多山が跡を継いで家主となった。また、半遮羅の妻は男の子を生み、この子は「半支迦」と名付けられた。

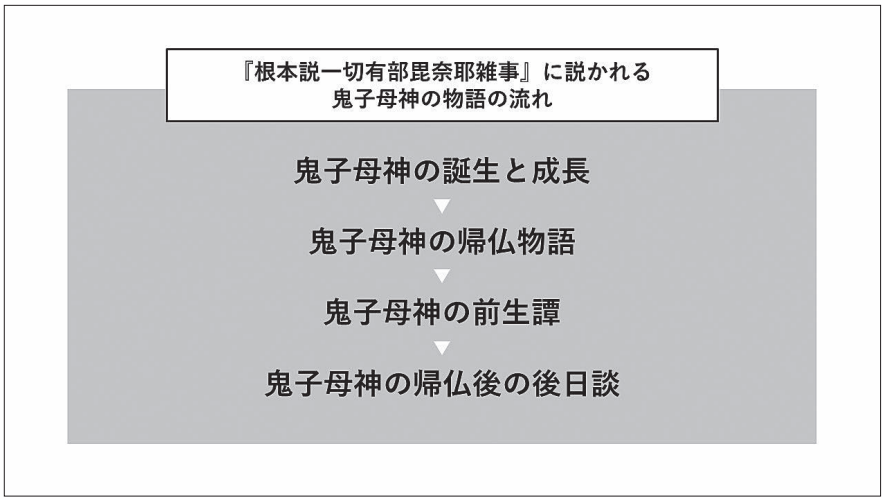
ある日、成長した歓喜は弟に対し、「王舎城に行って人々の子どもを皆取ってきて食べたいと思う」と打ち明ける。弟の沙多山は驚いて、「我々は代々王舎城を守護し続けてきたのに、なぜそのような悪心を抱いてしまうのか。そのような考えは捨てるべきだ」と言って姉の歓喜を戒めたが、歓喜は気持ちを変えることができない。原文には、「薬叉女は前身に於て悪邪の願を発せる習気力に由りての故に」（大正二四、三六一中）（薬叉女〔の歓喜〕は前生において立てた邪悪な誓願の強い影響力により）このような悪心を抱いたと述べられている。

自分の力では歓喜を止めることができないと感じた沙多山は、父が生前から取り決めていた姉の婚姻を進め、夫となる半支迦に歓喜を止めてもらおうと考えた。半支迦と結婚し健陀羅国に移った歓喜は、しばらくして夫と打ち解け

【図一】


『根本説一切有部毘奈耶雑事』「第七門第一子」の構成
鬼子母神の物語
❶「笈多児と宿する」
(T24, pp.360b-360c)
❷「王舎の薬叉神」
(T24, pp.360c-363a)
❸「児に衣を施して項に繋げる」
(T24, pp.363a-363b)
❹「称名して祭食を与ふ」
(T24, p.363b)
鬼子母神の誕生と成長
鬼子母神の帰仏物語
鬼子母神の前生譚
鬼子母神の帰仏後の後日談

【図二】


『根本説一切有部毘奈耶雑事』に説かれる
鬼子母神の物語の流れ
鬼子母神の誕生と成長
鬼子母神の帰仏物語
鬼子母神の前生譚
鬼子母神の帰仏後の後日談

てきた頃、自身の恐ろしい欲望を打ち明けた。半支迦は驚き、「自らの故郷である王舎城の人々に対して、どうしてそのような悪心を抱けるのか。そのようなことを二度と口にしてはならない」と戒めたが、歓喜はこれに耐えがたく、怒りを抱き、黙ってしまった。

その後、歓喜は五百人もの子どもを産み、一番年少の末子は「愛児」と名付けられた。大勢の子どもを産んで薬叉女として十分に力を増大させた歓喜は、この力にまかせてついに自らの欲望を叶えようとする。半遮迦は妻を何度も説得したが、聞き入れられなかった。

こうして歓喜は故郷の王舎城に赴き、子どもを取って食べ始め、王舎城の人々は混乱と恐怖に陥れられた。

鬼子母神（訶梨帝）の前生譚―牛飼いの妻の物語―

歓喜が王舎城に赴いて人の子どもを取って食べ始めたあとの話は、「現在語られている鬼子母神の物語」の内容とほとんど同じなので、確認は省略する。

訶梨帝の帰仏後、釈尊の弟子たちは、「いったいどのような因縁により、訶梨帝は五百人もの子どもを産み、王舎城の人々の子どもを取って食べたのでしょうか」と釈尊に質問した。ここから、釈尊によって訶梨帝の前生譚が語られる。

釈尊は、「汝等諦かに聴け、此の薬叉女及び此の城人が先に作せる所の業は還須らく自らに受くべかりしを。」（大正二四、三六二下）（お前たち、よく聴きなさい。この薬叉女と王舎城の人々は、かつて自分たちが行った所業の報いを、当然自ら受けなければならなかったということを）と言って、語り始める。

昔、王舎城の牛飼いの男が妻を娶り、その妻はほどなくして妊娠した。その当時、世間に仏はおらず、ひとり静かに樹下に暮らしている独覚の聖者が、世間にとって唯一の福田であった。

ある日この独覚の聖者が王舎城にたどり着いた時、城内では大きな祭りが催され、五百人もの王舎城の人々が、音楽を奏でながら、花が芳しく香る庭園に向かっていた。この五百人の人々が、酪漿（牛乳で作った飲料）の入った瓶を持った牛飼いの妻を見つけ、「一緒に踊って楽しみましょう」と誘った。牛飼いの妻は欲望の心を抱いてしまい、人々と共に激しく踊った。

やがて牛飼いの妻は踊り疲れてしまい、それが原因でお腹の子どもをその場で流産してしまった。一緒に踊っていた五百人の人々は牛飼いの妻にかまわず庭園に向かってしまったので、ひとり残された牛飼いの妻は苦悩し、手で顔を覆った。そして持っていた酪漿を売ってしまい、五百個の菴没羅果（マンゴー）を買った。

そこへちょうど独覚の聖者が通りかかった。牛飼いの妻は、独覚の聖者の尊い姿を見て、その目の前に近づき、礼拝し、先ほど買った五百個の菴没羅果をすべて独覚の聖者に布施した。この布施に対し、独覚の聖者は、大きな鳥が翼を広げるかのように虚空に浮かび、さまざまな神通力を見せた。

この独覚の聖者の行動に対して、釈尊は「諸々の独覚者は但だ身を以て化して口に法を説かざれば」（大正二四、三六二下）（諸々の独覚はただその身を以て衆生を教化し、言葉によって法を説くことがないので）と述べている。さらに、「凡夫の人、神通を見ん時は心便ち帰向すること大樹の崩るるが如くにして」（大正二四、三六二下）（凡夫の人々が神通力を目の当たりにすると、たちまち心が〔その神通力の方に〕向かって行ってしまうことは、まるで大きな木が倒れるようなものである）と続ける。

独覚の聖者の神通力を目撃した牛飼いの妻は地に倒れて合掌し、ついに「この布施の功徳により私は将来王舎城内に転生し、この地の人々の子どもをことごとく皆取って食べよう」という誓願を立ててしまった。そして釈尊は、この牛飼いの妻こそがあの訶梨帝の前生の姿であり、独覚の聖者に五百個の菴没羅果を布施して立てた悪願により、王舎城に薬叉女として生まれ、五百人の子を産み、そして王舎城の人々の子どもを食べたのだと明かした。

このことについて釈尊は、「黒業には黒報、雑業には雑報、白業には白報あり」（大正二四、三六三上）と説き、弟子たちに「白業」を修して「黒業」や「雑業」から離れるよう諭している。

鬼子母神（訶梨帝）とサンガの後日談

訶梨帝の前生譚が説かれたあとは、後日談となる。

釈尊に諭されて仏教に帰依した訶梨帝は、人々に対して害をなす「悪い薬叉」から釈尊の教団（サンガ）を守るため、自分の子どもたちをサンガに布施した。訶梨帝の子どもたちは、釈尊の弟子たちが乞食に行く際に、人間の子どもの姿で付き従った。王舎城の女性たちが「これは誰の子なのですか」と質問すると、釈尊の弟子は「これは訶梨帝の子です。他の薬叉が悪事を働くので、こうして我々を守護するために、彼女は自分の子どもを私たちに布施したのです」と返した。女性たちは「あの毒害薬叉訶梨帝が悪心を捨てて自分の子どもを布施したというのに、どうして私たちはわが子を布施しないでいられるだろうか」と考え、早速わが子をサンガに布施した。しかし、普通の人間の子どもがサンガを守護できるわけもなく、子どもたちはそこらじゅうを好き勝手に歩き回ったので、弟子たちは子どもの頭のてっぺんに古い袈裟のはぎれを結び付け、どこかへ行かないよう見守らなければならなかった。のちに子どもの親たちが財物と引き換えに子どもを返してほしいと申し出たため、結局人間の子どもはすべて両親のもとに返された。またこのとき、いつも徒党を組んで悪事を働いていた六人組の弟子たちが、子どもと引き換えに全財産を布施するよう要求し、釈尊に戒められている。

一方、訶梨帝の子どもたちも、本来食事の時間ではない時に食べ物を欲しがったり、自分たちのために用意されたものではないものを食べたがったりしたため、弟子たちが釈尊に逐一相談したことが記されている。

おわりに

以上、『根本説一切有部毘奈耶雑事』「第七門第一子」に説かれる鬼子母神の物語について、その特徴的と思われる部分を抽出し、説かれている内容について見てきた。そこには、「現在語られている鬼子母神の物語」には組み込まれてこなかった、「鬼子母神の誕生と成長」、「前生譚」、そして「帰仏後の後日談」が語られていた。

特に注目すべき点として、次のようなものが挙げられる。

❶薬叉には「善い薬叉」と「悪い薬叉」がおり、歓喜が生まれた薬叉の家は王舎城を守護する「善い薬叉」の一族であった。「王舎城の人の子どもをとって食べたい」と打ち明けた歓喜を、弟の沙多山も夫の半支迦も止めようとしていた。

→薬叉（薬叉女）であるからといって暴悪な性格であるとは限らないということであり、歓喜の恐ろしい願いに親族の薬叉も戸惑っていたことが伺える。

❷釈尊によって訶梨帝の前生譚が語られる際に、まず、訶梨帝と王舎城の人々は、かつて自分たちが行った所業の報いを自ら受けなければならなかったのだ、と前置きしている。

→鬼子母神の帰仏物語を聞いただけでは、「悪い鬼が改心して守護神となった」という印象を抱くのみで、王舎城の人々はただの被害者である。しかし、鬼子母神の前生譚を知ると、踊りに誘っておきながら牛飼いの妻が流産した際には彼女を見捨て、立ち去ってしまった王舎城の人々の行いと、その後、牛飼いの妻が邪悪な誓願を発して後生に薬叉女となったことは、無関係であるとは思われない。

❸独覚の聖者が、牛飼いの妻に神通力を見せたことに対して、釈尊は、凡夫の人々は神通力を目の当たりにすると、大木が倒れるように、たちまち夢中になってしまうものであると語っている。

→釈尊が訶梨帝を言葉によって諭したように、この時の牛飼いの妻にも言葉によって彼女の苦悩を取り除いてくれる人がいたら、恐ろしい誓願を立てることはなかったのではないだろうか。

❹訶梨帝が仏に帰依したあと、サンガに対して悪事をなす「悪い薬叉」からサンガを守護するために自分の子どもを布施していたが、このことを知った時、王舎城の人々は訶梨帝を「毒害薬叉」と呼んでいる。

→訶梨帝が改心したからと言って、子どもを食べられた王舎城の人々の憎しみや悲しみが、すぐに消えるわけがないことを表している。

現在広く語られている鬼子母神の物語（鬼子母神の帰仏物語）が長く人々に受け入れられ、語り継がれて来たものであることは、疑いようがない。しかしその一方で、多くの人によって語られ、洗練されてきた鬼子母神の帰仏物語は、彼女が「母」であり、「女性」であり、そして恐ろしい「鬼」であるという点が強調され、そこから得られる教訓が限定的なものになっている。時代が大きく変わりつつある今、原典である経典の内容を改めて確認していくことによって、鬼子母神に対する新たな発見がなされ、これからの鬼子母神の語り方に多様性が生まれるのではないだろうか。

《参考文献》

義　浄　訳　『根本説一切有部毘奈耶雑事』第七門第一子（大正二四、三六〇中―三六三中）

仏教説話文学全集刊行会
「鬼子母神物語」（『仏教説話文学全集』第一巻、仏教説話文学全集刊行会編、一九七六年）
大嶋　忠雄
『愛のハーリティ―鬼子母神の物語―』（さだるま新書、日蓮宗新聞社、一九八六年）
金子　保
「仏教とこころの深層―物語の心理臨床的意味―」Part1「鬼子母神の物語」（第十一回「心といのちの講座」日蓮宗生命倫理研究会主催、二〇一二年十一月十八日、於日蓮宗宗務院、講演資料：http://www.nvn.cc/lecture/mll1_0.htm）
中井　本蓉
「これまでの僧侶から、これからの僧侶へ―新たな時代の物語（ナラティブ）―」（『宗報』令和三年五月号、日蓮宗宗務院、二〇二一年、二二四―二二六頁）
「鬼子母神の物語論的研究」（現代宗教研究第五六号別冊『教化学研究』十三、日蓮宗宗務院、二〇二二年、六二―七二頁）
中村　啓承
「あなたは鬼子母神を許せますか?」（『宗報』令和四年二月号、日蓮宗宗務院、二〇二二年、四六―五四頁）
山田　琢玄
『鬼子母神縁起詳談』（等潤会、一八九二年）